



研究論文

過去 - 現在 - 未来をつなぐ ことばとアイデンティティの意味

「日本人らしい日本語」が話せない日本人である僕の物語から

鄭 京姫*

■要旨

本稿は、過去 - 現在 - 未来をつなぐ「移動」の本質に迫り、ことばの教育とアイデンティティのあり方を考察することを目的とし、「移動する子ども」として成長した一人の日本語学習者の「日本語人生」に注目したものである。「日系アメリカ人」として生育したアキラ君は、「日本人らしい日本語」が話せない日本人であると自分を評価していた。だが、自身の日本語が自分の誕生から今を支えてくれて、自分の家族をつなげてくれて、これからもその日本語を通じて日系人は生き生きとアメリカで暮らしていくのだという意味を見出してからは日本語に対する思いが変わってきた。そして、「日本人としてのわたし」から「日系人としてのわたし」という自分像を描いていたが、「日系人としてのわたし」には限定的で固定的なアイデンティティではなく、過去 - 現在 - 未来をつなぐことばとともにありたい自分を探求・探索していること、その過程がアイデンティティ形成であったのである。さらに、自分のことばの教育とアイデンティティの重要性が示唆された。

■キーワード

「移動する子ども」
「移動」
日系人
ことば
ライフヒストリー

©2012. 「移動する子どもたち」研究会. <http://www.gsjal.jp/childforum/>

1. 「移動」の意味に注目する理由

現代は移動と越境の時代であるといっても過言ではない。世界はめまぐるしく変化をしており、人々は国境を越え、移動をしている。その中には自分の意志で移動する人もいれば、移動せざるを得ない人もいるだろうが、日本語を学ぶために日本にやってきた彼／彼女らの

* 早稲田大学日本語教育研究センター (Eメール: hime_0404_4@yahoo.co.jp)

多くは自分の意志で移動を決断しているのであろう。日本語学習者の「日本語人生」の物語から日本語教育のあり方を問い直すことを研究テーマとしている私は、このように移動の経験をしている多くの日本語学習者と出会ってきた（鄭，2006；鄭，2011a；鄭，2011b）。「自国」から「日本」へ移動の経験をした彼/彼女らの中には、一つの母語と一つの外国語である日本語を学んでいるわけではなく、すでにいくつかの言語ができる人がいた。また、移動の経験を通じて自分の言語能力を意識し、日本での経験は他の場所に移動した後も活かされる物語にも出会った。何より、そこで語られた移動はただ越境という意味ではなく、その地域で使用する言語を学ぶためだけでなく、夢を抱いての「移動」でもあったのだ。このように、移動と越境の時代を生きる今日、「移動」はことばの教育において重要なキーワードであることは間違いない。日本語教育においても川上（2007，2009，2010a，2010b，2011）により、「移動する子ども」のことばの教育の重要性が提唱され、議論されている。私はそこでの「移動」の概念に注目した。なぜなら、「移動」の概念は、「移動する時代」（川上，2009，p. iii）に生きる子どもだけではなく、ことばを学ぶすべての人に欠かせない視点であるからだ。「移動する子ども」たちのことばの教育の重要性を議論している川上が言う「移動」とは、ある場所から他の場所へ移るといった辞典的な意味ではむしろない。川上（2011）は、「既成の境界を越えて子どもたちが『移動』するという動的な意味」（川上，2011，p. 6）として「空間間」，「言語間」，「言語教育カテゴリー間」を移動するという条件を持っていると展開している。

つまり、川上（2010a）が主張する「移動する子ども」という分析概念は「多様で動態性のある子どもたちの主体的な生きざまを捉えるための『子どもの像』（川上，2010a，p. 5）である。従って、「空間間を移動する」といった場合、その「空間」とは、過去 - 現在 - 未来という時間が織りなす「時空間」であると考えられる。ある人が生きて来た経験を始め、考え方、生き方に至るまでその人の人生が「空間」であり、「移動」は、過去 - 現在 - 未来という時間と空間の意味が織りなされていると言い換えられる。そこで私は、川上の言う「移動」の議論を踏まえ、日本語教育における「移動」の議論を「生きること」で考えたい。それは「場所」を「居場所」へ転換することの重要性を感じるからである。日本語学習者は流動的であり、移動と越境の時代において「場所」もまた、固定されたわけではなく、「今 - ここ」という場所を自分の居場所にしていかなければならない。

それでは居場所とは何を指し、どのような意味があるのか。「いるところ」という一般的な意味ではなく、「自分が心地よい」と感じる場所が居場所であり、「心地よい」という感覚は、「自分がそこにいてよかった」と思った瞬間訪れる感覚であり、それは自分のアイデンティティの実感でもある。どこで生まれ、どこで生きるかということが重要ではなく、「移動」もまた生きることの延長線上で考えたい。それが「移動」の本質であり、だからこそ注目している理由である。本稿は、そのような問題意識からその「移動」の本質に迫り、ことばの教育とアイデンティティのあり方を述べることを目的とし、「移動する子ども」であっ

た一人の日本語学習者の物語からそれらを検討していきたい。

2. アキラ君との出会いー〈日本人でもいいですか〉

鈴木アキラ君（仮名）¹は、アメリカで生まれ育ち、アメリカ国籍を有している「日系アメリカ人（Japanese American）」である。アメリカの大学で経営学を学んでいるアキラ君は、[インタビュー時の]半年前から交換留学で来日している。今回の日本は5年ぶりの上、東京での生活は初めてである。日本に来てその多くは京都の祖父母の訪問が目的で、東京の観光は1度しかなかったからだ。東京都内の某大学に設置された日本語のコースを受けているアキラ君は、他の留学生に交換留学だと言うと〈日本人なのに〉と面白がられる。帰国子女²とは少々立場が異なるとも言えず、留学生でも帰国子女でもない〈曖昧な立場〉のようだとアキラ君は話していた。そのようなある日、アキラ君は「日本語人生を語る」というインタビューのチラシを大学の掲示版で見かけた。〈自分の日本語人生も結構面白い〉と思ったためなのか心が躍ったという。しかし、インタビューを受けてみたいと考える一方、躊躇した部分もあったようだ。それは「日本語学習者」という括りがあったことだ。チラシには確か「日本語学習者の日本語人生を聞きたい」と書き、掲示していたことを私は覚えている。だがアキラ君は、〈自分は日本人〉であるが、日本語を学んでいるため〈日本語学習者でもあると判断した〉のだ。インタビューへの希望を周りの友人に話したが、〈日本語学習者というのは外国人だ〉と止められたそう。だがアキラ君は、自分も日本では〈外国人のような感覚〉を覚えることもあり、日本での良い経験になると考え、益々「日本語人生」を語るインタビューに惹かれていったと語る。アキラ君からメールが届いたときには正直に私も驚いた。私においては「想定外」であったからだ。アキラ君の周りの人たちのように、日本語学習者を「外国人」であると想定していたわけではないが、〈日本人でもいいですか〉という文面に確かに驚いていた。しかし、アキラ君が言うように、「日本人も日本語人生を生きている」のである。私はアキラ君のメールに早速返信をした。このような経緯が私とアキラ君との出会いである。二人は3か月間で2回インタビューを行った。ここで述べる2回のインタビューは実際ICレコーダーの前で録音をしながらの回数である。私は、アキラ君がアルバイトで出演したファッションショーに招待されたり、アキラ君が主催したパーティーに参加したりしたため、彼が帰国するまで4回は会っていた。従って、彼の

1 仮名。年齢、職業はすべてインタビュー時のものである。仮名のもと論文の公表の許可を得ている。

2 帰国生徒（窪田，1989）、帰国子女（角，芹澤，中西，坪井，1988；宮智，1990）、帰国生（稲垣，1990）と一様に定義できない。また「日系人」も、日系子女（中島，1988）ともされる。本稿では特に定義せず、語り手が語ったとおりに表記する。アキラ君は「帰国子女」、「日系人」と説明したため、そのように記し、論を進めることとする。

「日本語人生」の物語は IC レコーダーで録音をした 2 回分と私のフィールドノートによるものである。1 回目のインタビューの日、お互いに顔を知らないためどこで待ち合わせをするかをメールで連絡を取り合った。アキラ君から、〈中折れ帽をかぶり、耳にピアスをしていて、腕を組んで待っている〉と細かい設定が書いてあるメールが届いた。まるで映画〈007 の作戦みたいだ〉と、インタビューを楽しみにしていたようだ。1 回目のインタビューは 3 時間ほどの少々長いものであった。アキラ君は子どものときの話を笑顔で語り始めていた。

3. 研究の方法と概要

「アキラ君との出会い」でも述べたように、本研究は「日本語人生」を聴くことの一環で行われたものである。本稿で使用する「日本語人生」とは、学習者の日本語学習歴を始め、日本に来てからの生活の現状と感想、コミュニケーション上感じたことなど、彼らが日本語を使用して実際に生活を営んできたこと全てを含む。私は、学習者が日本語を学び始めた「あの時」から「今 - ここ」に至るまで、つまり、日本語学習のきっかけからその後の学習過程など、学習者一人ひとりの物語がどのように進んできたのかをライフヒストリー法を用い、「日本語人生」という枠を立て、インタビューを行うことにした。ライフヒストリー法を用いた理由は、学習者が語る意味を解き明かすのは「あるテーマを聞くのではなく、個人に注目し、その人の人生を含めて聞くこと」(中野, 桜井, 1995)が必要だと考えたからである。なお、「日本語人生」は語られた経験やさまざまな出来事を重視しているところから、物語を「語られた経験や出来事」であると捉えることとする。さらに、インタビューの形としてはナラティブインタビューを用いた。その理由は、「インタビューの経験世界に迫り、語り手の主体性を重んじ、語り手が自由な語りの生成過程を促す方法」(やまだ, 2007, p. 130)であることから本インタビュー法を採用するに至った。

アキラ君とは 2009 年の 3 月と 2009 年の 5 月に計 5 時間のインタビューをアキラ君が通う大学のラウンジと一人でよく訪れるというカフェで行った。インタビュー後は、テープ起こしした内容をアキラ君に確認してもらい、分析の段階に移った。分析には、IC レコーダーで録音したインタビューを書き起こし記述³したもの、及びフィールドノートを使用した。分析方法は「ストーリー自体を調査の対象として扱う特徴があり、単に、言語によって示された内容を見るのではなく、語りをなるべく切り刻まずに、語りの流れや全体的な形を

³ 記述にあたり、桜井, 小林 (2005, pp. 135-138) と、ザトラウスキー (1993, pp. 59-60) を参照し、トランスクリプトのルールを設けた。「…」は沈黙。ーは長音、?は上昇のイントネーションを示す。また、[] は補足説明であり、(()) はインタビュー場面の状況や、語り手の表情や聞き手が気づいたことの説明である。{ } は非言語的な行動。例えば {笑}。↑は質問を意味している。

大事にしながら、ナラティブの時間的な進行という文脈で捉えられている」（フリック，1995/2002，pp. 252-255）というナラティブ分析を用いた。

続く4章でその分析と考察を述べるが、4章は6つの項で構成されている。だが、順序立てて説明しているわけではなく、生まれ育ったアメリカ、留学で来日している日本、そして帰国を控えているアキラ君の過去 - 現在 - 未来の語りが混じっている。また、その物語にはアキラ君の家族や友人、先生など多くの人が登場するとともに日系人の歴史も紹介され、その物語に出会ってきた私の解釈も織り込まれていることを断っておく。さらに、6つの項で述べられる内容を5章の5. 1. において総合的に考察し、全体の結論として5. 2. で本論をまとめることが本稿の構成であることを付け加えながら、アキラ君の物語に出会うこととする。なお、本文に語りから引用する場合は〈 〉で表記する。

4. 日本人らしい日本語が話せない日本人である僕の物語

【アメリカで生まれたからといってバイリンガル⁴になるわけではない】

京都で生まれ育った父親は大学のときに語学留学で渡米し、母親と出会い、結婚、それ以来アメリカに定住している。母親は日系3世である。アキラ君より2歳上の兄と3歳下の妹もアメリカで生まれた。そのような自身を彼は〈日本人の父親と日系人の母親の間で生まれた日系アメリカ人〉であると紹介していた。

アキラ君の父親はアメリカで事業を起こし、何店舗か飲食店を経営している。父方の祖父母と親戚は京都と神戸にそれぞれ住んでおり、幼いとき3、4回ほど京都の祖父母に会いに家族で訪れたことがあるという。母方の祖父母はアメリカに住んでいるため、お正月やお盆、クリスマスなどを共に過ごしていた。アキラ君は〈日本人なのに家庭教師に日本語を教えてもらった〉と語り始めた。教えてもらったというより、話し相手のような関係だったという。その人—家庭教師—は大学院のマスター課程に在籍している日本人の留学生で、主に漢字と文法を教わったという。日本の最近の音楽や言葉も教えてもらったが、使わないとあまり意味がないと感じ、興味はなかったのだと語る。家庭教師とはいえども、〈兄貴〉のような関係で、よく遊んでもらったと嬉しそうに話していた。それがアキラ君、小学5年生のときである。日本語の家庭教師は現地校⁵に通うアキラ君のため、母親が下した決断だったのだという。アキラ君の母親は近所に住んでいる日本人や、「日本人会」のようなところからの

⁴ バイリンガルの定義であるが、一般的には、2つの言語を同等にしかも完全に使える人をイメージし、いわゆる「均衡バイリンガル」(balanced bilingual)を指すことが多い(岡, 2003, p. 24)が、一様に定義できないことを岡は指摘している。

⁵ 海外の子どもの就学形態は、日本人学校に通学する場合、現地校等と補習校に通学する場合、現地校等のみに通学する場合の3つの形態に分かれる(文部科学省初等中等教育局国際教育課, n.d.1)。

情報交換で家庭教師を思いついたようだ。日系人の集まりもあり、日本料理や日本文化に関して自然と接することが多く、多忙な父親にも日本語を教えてもらったアキラ君は、家庭教師までは必要ではないと話したが、母親は聞こうとしなかったと語る。

日本語の勉強だけではなく、習字を習わされたと語るアキラ君は、その理由として〈日本語の字〉があまりきれいでなかったことをあげる。何人かの友だちと共に、週に1度小さな塾を開いている日本人の主婦に習いに通った。その習字の先生の旦那さんはアメリカ人であるため、彼女は日本の文化を子供に教えたいという思いで始めたのが仕事になったそうだ。習字を習いに行っても〈頭の中はサッカーとバスケットボールとゲームでいっぱい〉だった。そのためなのか、1年半も習ったがそれほどきれいな字にはならなかったと語る。また、2年間くらいではあるが、兄と一緒に空手も習った。

近所に日本語学校と補習授業校（以下補習校）⁶があつて、アキラ君も小学4年までは現地校に通いつつ、土曜日は補習校に通ったようだ。その補習校の友だちは父親の海外勤務で来ていた〈短期〔滞在〕の子〉と〈長期〔滞在〕の子〉に加え、自分のように帰国の予定のない〈永住の子〉が通っていた。アキラ君は、彼らが自分とは異なると感じていた。何より、〈いつか日本に帰ってしまう友だち〉より、現地の友だちと遊びたかったという。アキラ君には少々早い反抗期が訪れたのだろうか。おそらくそれは一般の若者が通る「思春期」や「反抗期」とその意味が異なるものであつただろう。補習校にあまり通いたくなかったアキラ君は、とうとう登校を拒否したのだ。友だちも〈現地校に通う子〉が多く、補習校の授業がある土曜日は大好きなバスケットボールやサッカーの練習もあつたからだ。

あの、祖父ちゃん、祖母ちゃんと家族で話すときはー、もちろん日本語もありますけど、英語も多いんですよー、日本語も例えば丁寧な敬語とか、そんなに難しいこと言うのもないしー、別に習わなくても話せるからーと思って、反抗期でしたね{笑}。

結局、アキラ君は通うことをやめさせてもらったようだ。現地校では英語、補習校では日本語といった、二言語を行き来する生活のサイクルが負担になってきたのであろうか。

補習校で漢字を習ってもなんか、ただ記号みたいなー。覚えてもすぐ忘れてー{アッハハハ}。漢字習っても書くこともあまりないー。学校〔補習校〕でテストをするときとかは一応できるけどー。漢字できなくても、家族と話したり、祖父ちゃん、祖母ちゃんと話したりできるし、ぜんぜん、問題ないしーそう思ってー。

⁶ 補習校授業は、現地校やインターナショナルスクール等に通学している日本人の子どもに対し、土曜日や放課後を利用して日本国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設である（文部科学省初等中等教育局国際教育課，n.d.2）。

日常生活の中で日本語は全く不自由しなかったそうだ。それでも母親は日本語の勉強に関しては〈頑固〉だったという。アキラ君は母親に〈九九を覚えさせられた〉ことを微笑みながら語り始めた。

日本語で九九ですよー。もぉー、それは毎日の課題みたいにやっててー。犬じゃねえんだからー、エサを持って、しつけなんかやっている人いるでしょう？良くてきたらヨッシヨッシと頭撫でてみたいなあー。

アキラ君は母親の〈頑固な教育〉に不満があり、また、〈自分が興味のあるものを自由にしたいのに〉母親は半分強制的であったことから反抗したのだと語る。日本語での九九は今も口に残っているほどである。父親と祖父母はそれほど厳しくないが、母親は頑固で厳しかったようだ。毎日のように〈あなたは日本人だから、日本人としてちゃんと覚えなさいといけない、日本人らしくしないといけない〉と母親は話していたのだという。

でも、俺には、英語も日本語もどれも母語で、どれも外国語ーみたいな感じもありましたよ。まあー、アメリカで生まれたからといって、みんな自然とバイリンガルになれるわけないしー。でも、あまり日本人はそんなの知らないよねー。

アキラ君はインタビューにおいて、「母語」と「外国語」という用語で自分の言語を語ったのはこの語りのみであった。それでは、アキラ君が「母語」と見なしている言語とは何であろうか。Skutnabb-Kangas (1981) が定義した、「最初に習得した言語」、「もっとも知っている言語」、「もっとも頻繁に使用する言語」、「自分が母語だと見なしている言語、他人によって母語だと見なされている言語」つまりアイデンティティを感じる言語という基準で考えるとすれば、そのどれも当てはまり、そのどれも当てはまらないのである。アメリカで生まれ育ったアキラ君は、とりわけ「アイデンティティの葛藤」は感じていないが、母親から「母語である日本語」を強要されるたびに、混乱し、自分にとって「英語」と「日本語」という二言語はそのどれも「母語」でそのどれも「外国語」であると捉えられてしまったのであろう。

カナダに在住し、自身の経験からバイリンガルの問題と課題を取り上げている中島(1998)は、海外子女をバイリンガルに育てることは、母語と外国語をバランスよく発達させることであると述べ、日本語を「母語」とし、その土地のことばを「外国語」である (p. 123) と捉えている。だが、これからその土地で暮らしていく上で必要な言語を「外国語」として括ることがはたして意味があるのだろうか。

また、一つの言語がしっかり出来上がっている上で、もう一つの言語を習得することはそ

れほど大変ではないかもしれないが、二言語を同時に習得することは困難であり、かなりの努力が必要であったことをアキラ君は語りたかったのであろう。その困難ゆえであろうか、「バイリンガル」ではなく、「セミリンガル」に留まる指摘もある（小野，1994；Hoffman, 1985；Cummins, 2000；唐須，2002）⁷。小野（1994）は、どの言語も抽象的思考ができず、複雑な表現もできない多言語使用者のことをセミリンガルと呼び、海外在住子女は一步間違えばセミリンガルになる危険性を持っている（p. 70）としている。

アキラ君は幾度も〈アメリカで生まれたからといってバイリンガルになるわけじゃない〉と言っていたのだ。むろん、二言語を習得する環境は整っているが、英語だけでも十分だと感じていて、その上、強い意志がないとすぐにはバイリンガルにはなれないことを語る。しかし、周りの人に〈アメリカから来た日本人〉だと言うと〈いいね〉と軽く扱われ、二言語ができる状況を〈羨ましい〉と簡単に片づけられている気がしてやまないのだと語る。さらに、ここで注目したいのは、「日本人はそんなの知らない」と語ることである。アキラ君は、「アメリカで生まれた日本人」であるため自然と英語や日本語を身に付けられたわけではなく、人の倍以上の努力をしてきた。しかし、「日本人」は知らない。ここでの「日本人」とはアメリカにいる日本人を指しているのではなく、現在、日本で出会う「日本人」、あるいは「一般的な日本人」を指していることであろう。また、日本人が知らない「そんなの」とは、「アメリカで生まれた日本人」として「日本語を学ぶこと」がどれほど大変であるかを指していることもうかがえる。その上、〈日本人〉である自分自身と、「一般の日本人」とは異なっていると考えていることがわかる。

【同時に生きる二言語の世界】

京都の祖父母は兄弟が揃って大好きな「ガンダム」と童話と絵本、〈Kitty ちゃん人形〉などを、毎年の誕生日やクリスマスに送ってくれたという。妹の部屋は〈Kitty shop〉のようにいろいろな〈Kitty ちゃん〉グッズが揃っていたと楽しそうにアキラ君は語っていた。〈鈴木家〉の言語は日本語であったという。家族では日常会話だけでなく、食事も〈日本式〉であったようだ。朝は、それほど食欲が湧かないアキラ君はトーストやシリアルで済ませたいがそうはいかない。仕事をしている母親は、忙しい朝でもご飯に味噌汁や漬物、時には煮魚を作ってくれたという。

アキラ君の家は他の日系アメリカ人に比べ、かなり珍しいと彼は紹介する。アメリカにいる祖父母と母親は日系人だが、英語だけではなく、〈日本語もちゃんと話せる〉。特に母親は他の日系三世に比べかなり上手である。日本語だけではなく、日本文化も身近に触れていた。

⁷ Hoffman (1985) は、言語が十分に発達しないことをセミリンガルとし、バイリンガリズムの大きな恐れであるとした。また、Cummins (2000) は、二言語の能力が低いことをセミリンガルであると、唐須 (2002) も、どちらの言語も中途半端で、それこそ半分しか持っていないと考えられている人たちのことである (p. 62) としていて、「失敗」している状態を指しているのである。

お正月は、祖母の手作りおせち料理の数々が食卓に並び、近所の人や親戚一同が集まって一緒にお祝いをしたという。日本に来てから、それが〈簡単なもの〉であり、〈気持ちだけのおせち料理〉だったことだとわかったと彼は語る。留学のために来日して 5 か月が経った頃ちょうどお正月で、アキラ君は京都の〔父方の〕祖父の家で年末年始を過ごすことにしたという。そのときに、祖父の家で食べたおせち料理がアメリカで食べたものとはかなり異なると感じたが、アメリカでおせち料理を作ってくれたお祖母ちゃんに感謝しているのだと語る。私が思わず「優しい」と言ったら〈日本人っぽい〉とアキラ君は言った。アキラ君は、日本の女の子は〈優しい〉と言う言葉を口にするのが多いのではないかと話す。「日本人であるアキラ君」は、「日本人」に対するイメージを持っているのだろうか。その〈日本人っぽい〉という言葉が気になった。私の一言は、思わぬ方向に流れ、アキラ君は「日本人」を語り始めた。その中で、母親の日本語は〈普通の日本人〉が使う日本語ではないことを〈〔日本に来ている〕今〉はそう思っていることを語る。〈普通の日本人〉とは何か。なぜ〈今〉になって母親が〈普通の日本人〉ではないと語るのか、アキラ君は〈普通の日本人〉ではないのか、それは何か、いろいろな疑問があったが、私はアキラ君の「日本語人生」に耳を澄ませた。

俺は箸も上手に使えるし、刺身も大好きですよー。日本人だから刺身を食べれると、当たり前だと思うかもしれないけどー、俺の友だちは日本人だけど魚一、食べられない人もいますよ。

その友人は、「日本人は生の魚を食べるから変だ」と、周りの子どもにからかわれたようだ。そのせいで魚を食べられなくなったかどうか確かではないが、周りの日本人には〈魚アレルギー〉だと話しているのだという。同じ「日本人」であっても、生の魚が食べられる自分のほうがより「日本人らしい」と考えているのであろうか。母親のおかげでアキラ君は魚も食べられるし、味噌汁も作ることができる。それをなぜか嬉しそうに語りながら、再び母親を語る。確かめてはいないが、母親は子守唄も日本語で歌ってくれたのではないかと思っていることをアキラ君は語る。なぜなら、3 歳年下の妹が生まれたとき、母親が日本語で歌っていたことを覚えているが、何となくその音色が耳に残っているからだ（アキラ君は、俺は天才かもしれないと笑いながら嬉しそうに語る）。インタビュー後、母親に確かめるためスカイプ⁸で連絡をしたそう。母親が 3 人の兄弟に子守唄を歌ってくれたこと、その歌を聴くとアキラ君が一番ぐっすり眠りに入ったこと、母親もその母親〔祖母〕に、よく日本語で子守唄を歌ってもらったことを確かめられたようだ。優しい母親は昔話も日本語でよく聞かせてくれたのだという。

⁸ Skype。インターネット電話サービス。

また、父親は大学まで日本で生活をしてきたため、アキラ君は父親が使用する敬語を聞いて覚えることも多くあった。「ご連絡させていただきます」ということを聞き、父親に「させてください」という敬語表現について聞いたこともあったという。確かにアキラ君は初めて私にメールを送った際、「ぜひインタビューさせていただきたいと思います」という文面で送ってくれた。アキラ君は父親に丁寧な敬語⁹であると聞かれたことを話し、まだ会ったことのない私にメールを送ることであるため、丁寧な敬語で送りたいと考えたと語る。だが、それほど緊張はしていなかったこと、そして、日本語を少々間違っているにもかかわらず理解してくれると考えたことを付け加えて語ってくれた。決して私が日本人でないからだけではなく、アキラ君自身がアメリカで生まれ育ち、日本に交換留学で来ている自分の日本語に接し、笑われることはないと考えたと 2 日目のインタビューのときにそう聞かせてくれたのだ。〈普通の日本人〉ではないアキラ君と韓国人である私を彼は〈わたしたち〉と捉え、〈わたしたち〉は〈わたしたち〉の日本語を理解しあっていると考えているということだろうか。とにかく、アメリカでは、「玄関」という一枚のドアを挟んで、中は「日本」そのもので、外は「アメリカ」、そのような感覚を覚えた記憶もあったとアキラ君は語るのである。

何年か前だけど、アメリカで銃乱射事件があつて一。人がたくさん死んでさ……。そういうの、家で〔テレビを〕見てるとアメリカに住んでいても、なんか外国のニュースを見ている感じもして……。日本で地震が起きたり一、なんかそういうのがあると、大丈夫かなと心配になるときもあるし……。俺はたぶん日本人だから一と思ってたんですね {笑}。

特に、〈日本の世界〉である〈鈴木家〉の中では「日本人である」ことに疑問を抱いたことはなかったのであろうか。アキラ君は、二つの世界を同時に生きている感覚の中で、自分はやはり「日本人」であると感じたのだと静かに語り続けていた。

【母親への思い】

現在、アキラ君の兄は自立し、実家と離れてニューヨークに住んでいる。アメリカではアキラ君も、大学の近くでルームシェアをしていたため、日本語を話す機会はそれほど多くな

⁹ 近年、「させていただきます」が多く使われる傾向があり、アキラ君が丁寧な敬語であると捉えているように、一見丁寧のようだが、その本来の意味合いは異なっている。平成 19 年度文化審議会の『敬語の指針』によると「(お・ご) … (さ) せていただく」といった敬語の形式は、基本的には、ア) 自分側が行うことを相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ) そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に用いられる。したがって、ア) イ) の条件をどの程度満たすかによって、「発表させていただきます」など、「… (さ) せていただく」を用いた表現には、適切な場合は、適切だと感じられる程度(許容度)が異なる(文化審議会国語分科会、2007、p. 40)とされている

かった。仲良しの兄とアキラ君は二人とも母親に反抗をしてしまったのだという。

アキラ君の兄は、英語は使えない日本式の教育を受ける日系の幼稚園に通った。日系人としての母親は、〈日本人としてのアイデンティティ〉が強い人だとアキラ君は話す。母親は日本語を学ぶのではなく、日本人として知っておかなければならない感情や歴史そのすべてを学ぶことだ、と子どもたちによく話していたからだ。幼かった兄弟にとって、母親の教育は〈プレッシャー〉だったのだろうか。結局、優しい兄も反抗してしまったようだ。両親は日本語で話しているのに、いつも英語で答えるし、日本語で言われることはしようとしなかったという。

補習校に行きたくないと言っ母ちゃんに言って怒られて一。あんたは日本人だから日本語を話さないといけないでしょう？ {アッハハハ} って。怒るときにはあんた一 ((母親の口調であると真似しながら)) だったんですよ。

普段の母親は、「あなた」という言葉にうるさい。アキラ君のお兄さんが、英語の「YOU」を間違っ「あなた」と日本人に言ったことがあるからだという。その日以来、母親は、表現一つ一つに厳しくなっったようだ。父親を呼ぶ時も、〈パパ〉と呼んでいると言いながら突然何かを思い出したかのように顔に満面の笑顔で語り続けた。

アキラ：で、パパって一、うちの母ちゃん、知ってるのかな一 {アッハハハ}

私： はい？ どういう意味ですか？

アキラ： え一、 ((驚いた表情で)) 知らないですか？ 日本のなに、え一と、slang？

私： {アッハハハ} そういう意味ねえ一。

アキラ君は日本語の俗語としての「パパ」の意味を母親は知らないはずだと話、アメリカに帰ったら確かめてみようと思っっているのだと笑いながら話を続けた。母親へのお土産は〈母ちゃんが知らない日本語〉を持ち帰りたいと最近の日本語の〈slang〉を勉強しているのだという。やんちゃなアキラ君の一面がうかがい、私も楽しい気分で語りを聞いていた。母親の教育に対する不満を語りつつ、誰よりも母親への思いを持っている印象を受けていた。

母の気持ちが理解できるような、できないような一俺は自然でいいのに、なんか言われるとやりたくなくなるし一。だから反抗したかもしれないですね {笑}。
まあ、優しい妹はずっと補習校に通っ、3人の中で一番日本語うまいかもしれないです一 {アッハハハ}。

父親は日本で生まれ、成人になるまで日本で育っったからなのか、それほど〈日本人とし

て」と、うるさく言うこともなかった。日本語ができると将来に役に立つから自分のためだと思って勉強しなさいと言うくらいだった。しかし、母親はアメリカで生まれた日系人である。だからなのか、〈日本人として日本語をちゃんと話さないといけない〉と〈しつこく〉言っていたと説明する。アキラ君はそのように〈強制的〉なことには耐えられなかったのだろうか。しかし、それほど頑固だった母親の日本語教育を理解する出来事があった。

【日系人の歴史を知る】

アキラ君は、日本への留学は自分の意志であることを語り始めた。日本に来たのは、やはり自分は「日本人」であると感じたからだという。

母の気持ちというかー最初は、母がアジア人だからいじめでもあったからかなーとなんとなくそう思ってたー。でも、それは日系人だからですねー。

アキラ君の祖父母は、第二次世界戦争の時代にアメリカで生きた日系人である。当時、何の罪もない日系人たちは「強制収容所」¹⁰に入れられた。日系二世¹¹であるアキラ君の祖父母はその経験者であるのだ。この話は 2 年ほど前に初めて聞いたとアキラ君はゆっくりとした口調で語り続けていた。兄がニューヨークに移るとき、その話を聞かされたという。祖父母からは一切聞かされたことなかった話に、アキラ君は戸惑ってしまったという。何となく日系人は苦勞したことを聞いたこともあり、強制収容所のこと聞いた覚えはあるが、気に留めたことはなく、ましてや自分にとって〈大切な祖父ちゃん、祖母ちゃんが被害者であった〉とは想像もしたことがなかったからだと言っている。

俺が、いまー、アメリカで平和に暮らして、勉強ができて、食べて、なんかそういうのは全部、たくさんの日系人の犠牲があったと思えてー。なんか、祖父ちゃんと祖母ちゃんが話してくれたら母の気持ちもなんか早くはわかったっつうか、理解できたっつうかー。

¹⁰ 1942 年 2 月 19 日、ルーズベルトの大統領法政命令「9066 号」に従い、日系人の強制収容が始まった。日系人の強制収容とは、第二次世界大戦時においてアメリカ合衆国やアメリカの影響下にあったペルーやブラジルなどのラテンアメリカ諸国の連合国、またカナダやオーストラリアなどのイギリス連邦において行われた日系人や日本人移民に対する強制収容所への収監政策である。強制収容者の住居に宛がわれた建物は、いずれの強制収容所においても急ごしらえの木造の「バラック」というべき粗末なもので、その後もきちんとした建物に建て替えられることはなかった。(出典：フリー百科事典 ja.wikipedia.org/wiki/強制収容所、閲覧日 2011 年 4 月 30 日)

¹¹二世とは、アメリカへ移民を許可されて渡航した一世の子としてアメリカで生まれ、自動的にアメリカの市民権を持った者たち(田村, 1984, p. 58)であり、実際には二世こそ日系アメリカ人の最初の世代にあたる(キタガワ, 1986, p. 37)とも言われる。

第二次世界大戦時に強制収容の生々しい体験をもとに描かれた収容所生活の記録（田村，1984；キタガワ，1986；北村，1992）を読み，アメリカ市民であるにも関わらず，その権利の主張もできず，強制収容所に送り込まれていたことを私も初めて知った。そして，日系人として生きて来た人たち，これからも日系人として生きる人たちのこと，そしてアキラ君を考えながら私はしばらく思いにふけた。戦前，「帰化不能外国人」「敵国人」として差別と偏見のまなざしに置かれてきた日系アメリカ人は，戦後「モデル・マイノリティ」と呼ばれ，日系アメリカの成功物語（本田，1991）が語られたのだ。しかしその成功物語には，「立派なアメリカ人」と「日本式行動様式」の狭間に立たされ，成功しなければならなかった苦悩がうかがえる。例えば一世は，二世がアメリカ社会で差別されないためにも，「立派なアメリカ人になることが日本人としての誇りである」（江淵，2002，p. 218）と考え，そのように教えた。それにより二世は高い学歴を持ち，日本的価値観，行動様式，規範，日本語を習得していった（竹沢，1994，p. 79）。

アキラ君は，現在の自分が何の不自由なく生活できる状況を日系人の歴史であると捉えている。アキラ君の祖父母は日系二世であり，その娘であるアキラ君の母親は日系三世である。日系人はそのような世代による特徴¹²が説明されてきたことも事実であり，アキラ君の語りからも現在は魚を食べられない日系人もいれば，日本語を話せない日系人もいるとあった通りだ。アキラ君は日本というルーツを大切にする日系人もいればアメリカ市民としての生活を重んじる日系人もいることを挙げていた。しかし，日系人にとって「強制収容」という歴史的な出来事は，時代を経ても，歴史が物語る意味は語り継がれるのではないかと考えたのであろうか。〈母親の気持ち〉を早く理解できたら，反抗をしなかったはずだと振り返るのは，母親が子どもたちをただ，「日英バイリンガル」に育てたいという思いがあり，そのように厳しくしていたのではなく，「日本人なのだから日本語を覚えなさい」というむやみに聞こえた〈母親の気持ち〉もまた，日系人の歴史が物語っていること，その日系人の歴史を忘れないこと，日系人としての「日本人」の意味を分かってほしいという〈気持ち〉であるとアキラ君は理解していったのであろう。

私はアキラ君に，何となくだが，お祖父さんとお祖母さんの気持ちも理解できる，と話した。アキラ君の祖父母はなぜ（孫に収容所の体験を）語らなかったのだろうか。それは自分の孫世代は心の傷がなく，アメリカ社会で元気に生きてほしいという願いからではないか。しかし，歴史は語り継がれることによって，歴史の意味，歴史が物語っていることが分かち合われる。戦争を知らない，歴史を知らない人と人が互いを知っていくためには，語り，

¹² 日系人の世代の特徴は，一世は竹（バンブー），二世はバナナ，三世は蜂（ビー）として説明される。一世は，差別に対して竹のようにしぶとく耐えながらアメリカで新しい世界を切り開いてきたのであり，二世は，外見は1世と同様に黄色（日本人）であるが，中身は白人に近く日本人なのかアメリカ人なのか鮮明ではないこと，主に戦後生まれの三世は活動的で自己主張が激しく完全にアメリカナイズされている（田村，1984，p. 59）とされる。

分かち合っていくしかないと考える。私の話にあキラ君も頷いていた。日系人の歴史を知ったあキラ君は母親の気持ちを理解できたのであろう。あキラ君はその話を聞き、驚き、眠れないほど辛かったと語った。祖父母の苦労だけではなく、その娘である母親はどれだけ苦しい日々を過ごしたかを考えたのであろう。そして、〈アメリカでマイノリティ〉として生きることがどれだけ大変だったのか、あキラ君はその思いを感じていたのではないか。私でさえ初めて聴く話で涙が出そうになり、こんなに胸が熱くなったのだから。あキラ君は日系人の歴史を〈普通の日本人〉は知らないと考えているのであろうか。アメリカで生まれたからといってすべての人がバイリンガルになるわけでもなく、大変な歴史を生きて来たことを〈日本人は知らない〉という言葉で説明していたと感じられた。祖父母と母親は「Japanese American」として呼ばれており、また、「ガイコクジン」としてアメリカ社会で生きてきた。そしてそのような感覚は、日本でも感じられた。日本に来て〈純ジャパ〉でも〈変ジャパ〉でも〈半ジャパ〉でもない「ガイコクジン」としての自分の現実に直面することになったからだ。

【日本人らしくない日本語を話す僕】

初日に会ったあキラ君は、自分のことを〈アメリカで生まれた日本人/日系人〉であると紹介した。将来、日本で生活をしていくかどうかはわからないが、父親の会社を継ぐ予定なので、おそらくアメリカで暮らしていくだろう。なので、一生涯「日系アメリカ人」として生きることになる。だが、「日本人である」自分のルーツを知ること、それがアメリカで生まれた日本人としての役割だと感じたあキラ君は、その理由で日本語を勉強しに来たのだ。しかし、アメリカで感じたことと同様のことを日本でも感じるようになる。

アメリカでは、そこで生まれ育っても外見はアジア人であり、名前が日本名であるため、〈アメリカ人〉ではないと見なされる。初めて会った人には、チーナ (Chinese) かジャップ (japanese) と呼ばれることもあるという。

韓国人も日本人もみんなチーナですよー。わたしたちはアジア人だから。でもなんか日本ではアメリカナイズ [Americanize] されたと言われるしー。

京都の親戚以外、〔特に大学で〕彼を迎えてくれたのは〈帰国子女〉という人たちであった。「異邦人」としての感覚を共有し、共感するのは同じく外国で生まれ帰国した〈帰国子女〉と呼ばれる人と、「異邦人」としての感覚をともにしている「外国人留学生」であろうか。周りの「日本人」はアメリカに憧れているのか〈羨ましい〉と言い、〈プール付きの家で暮らしているのか〉と、アメリカに対するステレオタイプのようなことを確かめる人もいたという。だが、海外で育った〈帰国子女〉とは互いにそのようなことは言わず、理解し合っているとあキラ君は感じているのか、日本語ができなくても英語で話せるし、正直に話

が合うと語る。また、同じ留学の立場にいる外国人ともそのような話にはならないことを付け加える。現在の生活の中で、帰国子女や外国人と多く接しているからでもあるが、日本人との付き合いに少々悩まされることもあるという。アキラ君は、日本語の授業の先生が厳しいことを挙げ、本を読んでもくださいと言われることが〈一番嫌である〉と大変困っている顔で話を続けた。声を出して読むのは、アメリカにいたときから好きではなく、学校でそのような授業は行われなからだ。

一人で読んで、その後議論すればいいじゃないですか？。なんで日本語の先生はみんな読ませる {笑}。あとは、俺の姿勢 [座り方] でやっぱー、アメリカナイズされてるねーと言う先生もいたしー。

驚く私に、本当だと笑顔で話しながら、クラスの中では「アキラ」ではなく、「鈴木さん」と呼ばれる。そう呼ばれると、〈アキラでいいのに〉、と思うときもあるという。

アキラ：鈴木さんってあまり慣れてなくて。アメリカでも「アキラ」だから、「アキラ」でいいですよ。で、日本語の先生にまあ、先生、アキラでいいですよとちょっと怒られた。先生にそんな言い方はしないってー。でも、俺は優しく言ったつもりだったけどー。

私： いいですよ！と言ったから言われたかなー。

アキラ： まあ、それもあるし、普段の俺の姿勢とかあんま好きじゃないかもしれないし、とにかく俺は鈴木さんでー、学校では {アッハハハ}。

他の日本語の授業でも似たような経験があったようだ。授業の休憩時間になり、アキラ君は、イギリスからきた友だちを「さん」を付けずに名前と呼んだという。すると教卓にいた先生に〈〇〇さんって言わないと〉と話を挟まれた。アキラ君は意識していなかったという。先生に言われて自分の行動が「日本的」ではないとわかった。先生にとって「鈴木アキラ」は日本人である。当然のごとく、日本人であるから日本的なことをしないと見なされている。アキラ君はそう考えたのであろうか。またその考えは、「鈴木アキラ」である日本人なのに、日本的ではない自分の姿勢、アメリカナイズされた自分を先生はきっと好きではないと見なしていくことになる。だがそれは、アメリカナイズされたと無自覚に言う教師の発言から起因したことも多い。〈日本的ではないアメリカナイズされたあなた〉と「日本人」は異なるのだとほのめかす言い方になってしまうからである。また、〈アメリカナイズ〉されたと言うことの根拠とは何か。アキラ君はそれに関して、〈自分のしぐさや歩き方、日本の若者の間で流行る服装ではない〉ことを挙げているが、ただアキラ君がアメリカで生まれ育ったこと、英語ができることを聞き、そこで〈アメリカナイズ〉されたと判断してい

るのではなからうか。

加えて〈日本人らしくない日本語〉だと、友だちに言われたこともあることを語った。アクセントが違うのかわからないが、それほど悪くないと考えているのに、なぜかそのように言われてしまう。アキラ君は「日本人らしくない日本語」を話す日本人として少々焦る気分があったことを語り続けた。

俺は敬語もちゃんと話せないしー、あまり難しい漢字も読めないしー、書けないしー。日本人らしい発音でもないしー。やっぱ、アメリカナイズされたと言われるとそっかーと思うし。なんか焦りますね。俺も日本人だけど、日本人らしい日本語だと言われるとー、普通の日本人が聞いたら違うんじゃないですかね。純ジャパでも半ジャパでも変ジャパでもないんでー。

ここでアキラ君は自分の日本語の評価を行っている。アメリカナイズされた自分の日本語は「日本人らしい日本語」ではないと捉えている。アキラ君は、父親が話す敬語を聞き、その意味を尋ね勉強をしてきた。アキラ君は自分自身の日本語について〈それほど悪くない〉と考えていたが、「アメリカナイズされた日本人」である自分の日本語は「日本人らしい日本語」を話していないと評価に対する認識が変容したのではないか。

また、私はアキラ君の話が申し訳ないが理解できないこともあった。〈純ジャパ〉とは「純粋ジャパニーズ」つまり、日本で生まれ育った日本人を指すことは私も聞いたことがあるが、〈半ジャパ〉と〈変ジャパ〉があるのは知らなかったからだ。アキラ君に説明してもらったのを話すと、〈半ジャパとは言葉どおり、日本人が半分という意味で、ダブルやハーフと言われる人〉を指し、〈変ジャパは、帰国子女のことを指す〉と語る。海外成長日本人である帰国子女の適応における内部葛藤を検討した巖岩（1987）においても、帰国子女の適応の類型と葛藤のプロセスが描かれていて、そこにも「変ジャパ」と「純ジャパ」という二分する力を問題としている。アキラ君が、「帰国子女」という人たちが一番の理解者であると話したのは、自分と似ている境遇と葛藤を彼らが抱えていると思っているからであり、海外で育って帰ってきた「日本人」に対する目がどれだけこの社会で厳しいかを物語るのである。

だがアキラ君は、〈純ジャパ〉でも〈変ジャパ〉でも、そして〈半ジャパ〉でもない、〈中途半端なジャパニーズ〉として生きているのだと捉えると思われる。アキラ君は、アメリカではアメリカ的価値観と日本的行動様式の狭間に立たされたのであろう。日本語と英語に関してそのどれも母語でそのどれも外国語と語り、アメリカで補習校に通うことを拒んだ理由には〈永住の子〉である自分は〈短期〔滞在〕の子〉と異なるという意識があったからではないか。それは日本に来て同じく感じることであった。自分の居場所はどこにあるのか。〈鈴木家の中では日本人であった〉というアキラ君の言葉がその心境を物語っているのでは

ないか。また、ここで注目すべきことは、アキラ君が行う自分の日本語に対する評価である。〈敬語もちゃんと話せない、あまり難しい漢字も読めない、書けない、日本人らしい発音でもない〉とし、それをアメリカナイズされた日本人であると捉え、そのような自分の日本語はできないとしていることである。ところが、アキラ君は日本語ができないわけではない。むしろ、アメリカナイズされた人たちは、「日本人らしい日本語」ができないというまなざしがあり、その根拠として敬語や漢字、そして読み書きを挙げているのではないか。

なんか発音とかおかしいとあいつ変ジャパだからという人もいるしー。日本人の中にいろいろな日本人がいるから面白そうでしょうー。でも、俺はそのどれも入らないんで、なんだー、まあ、日系人かー。日本に住んでないと日本人にはならないかもしれないっすね。

日本語が変だからといって〈変ジャパ〉とはひどい話だと憤慨する私をアキラ君は〈普通の日本人からすれば少々変だと思われるかもしれないことだけです〉、と笑顔で語る。なら、その〈普通の日本人〉という基準が良くないのではないか。人種を分けるような言い方はおかしいことであり、人としてしてはいけないことだと考える。一人ひとりが異なることは「変」でも、何でもない。異なることが当然であるからだ。それではなぜこのように線引きされた言い方をするのだろうか。それはれっきとした〈純ジャパ〉という言い方があるからではないか。それがあつ限り、帰国子女は自分たちが〈変ジャパ〉であることを当然のごとく思い、〈変ジャパ〉である自分を許容するのかもしれない。

【日本人らしさとは何か】

アキラ君は、幼い頃から「日本人らしさ」を求められた。だが、母親が語る「日本人らしさ」とは「日本人であるから日本語ができる」ということであつたとアキラ君は理解していたと考えられる。なぜなら、日本に来て理解していく「日本人らしさ」を、日本語ができるかできないかという問題だけではなく、「日本」に住んでいるのかどうか重要なことであると分かつていく語りがあつたからだ。〈日本に住んでいないと日本人にはならない〉というアキラ君の語りからそのような「日本人らしさ」の変化がうかがえる。アキラ君にはいままで何人かガールフレンドがいた。韓国人とも日系人とも付き合つたことがあるが、アキラ君が通う大学に交換留学で来ていた日本人と半年間交際をしたことがあるという。アキラ君は彼女によく日本語を教えてもらい、彼女のおかげで日本語が上手になり、自分自身はやはり「日本人である」と再認識したという。母親の教育熱で日本語学習を続けてきたため、自分自身は結構できると考えているのに、時々、彼女から言われた「日本人らしくない」という言葉に何度かショックを受けたのだと語り始めた。

俺が？みたいない。俺も日本人だから、日本人らしくないと言われると、
はあ？って思いましたよ。

アキラ君は最初、〈冗談〉だと思ったのだという。なぜなら自分は〈日本人〉であり、自分の日本語はかなりできると考えたからだ。だが、日本に来て〈普通の日本人〉に聞かれるとその言葉は〈冗談〉のように聞こえなかったと語る。アキラ君は、母親が〈普通の日本人〉ではないと語ったが、それは〈海外で生まれ育った日本人〉という意味であることがわかる。

普通とは何か。その定義に難い用語は、『広辞苑』によると、「広く一般に通ずること、どこにでも見受けられるようなものであること、なみ、一般」（新村，1998，p. 2341）であるとされている。変わった点がなく、特別でもなく、ありふれていることとするなら、それは日本という「地」に住む日本人を指すしかない。なぜなら、アキラ君のように、アメリカで生まれ、アメリカ国籍を持ち、親戚の半分がアメリカにいる日本人はありふれていないのだから。つまり、アキラ君が認識していた〈日本人〉は、ありふれた普通の〈日本人〉ではなかったということであろう。

アキラ君は日本で暮らす予定がないのに、どうして日本語を勉強しなければならないのかを考えたのか。最初、アキラ君自身は何のために日本語を学ぶのが理解できなかった。〈日本人だから日本語を学ぶのか〉。しかし、アキラ君が将来日本で暮らす予定は今のところない。アメリカの日系社会では、話せるし、聞くことができ、日本語は十分である。だが、日系人の歴史を知り、なぜか「日本人」である自分のルーツを知っていく必要性を感じ、日本に来たのだ。だが、現実には、日本人ではあるが〈普通の日本人〉にはなれない。「アメリカナイズされた日本人」、「英語が話せる日本人」、彼は、周りの〈普通の日本人〉にそう見られていると考えていることを私は何度も感じた。

いったい「日本人らしさ」とは何か。その判断は誰が行い、何を基準としているのか。

池田（1977）は、アメリカで日本語教育に携わり、そこに住む日系人の現実から日本語を日本人のように押し付ける必要はなく、日本語がわかるはずだと期待されることもしてはいけないとしている。なぜなら、アメリカで日本語を使用することも一生涯ないかもしれず、日本語を習ったからといって明るい未来の保証もないからだとしている。なぜなら、「日系人」とはアメリカの文化圏の中で成長した「日本人」ではなく、「外国人」である。そして日本語を学ぶ外国人を大別すると、もとの外国人である者と、一口に日系人と呼ばれるところの日系アメリカ人か日系ブラジル人という海外に移住した邦人の子弟に分かれる（pp. 196-201）と述べている。つまり、池田の言う日本人とは、どの文化圏で育ったかによって、日本人なのか、そうでないのかが「判断基準」である。日系人に「日本人のように押し付ける必要がない」としていることからわかるように、日本人とは異なる日系人に日本人らしさを求めても分かるはずがないとしていることであろう。換言すれば、日本的な精

神、価値観といったものは同じ文化圏で生まれ育った人たちで共有できるものであるとしていることになる。

アキラ君が言う〈普通の日本人〉は日本という「地」で生まれ育ち、共通の性質を有する「日本人らしい日本人」であり、アメリカの文化圏で育った日系人は、その文化を知らないため「日本人」とは呼ばなく、「外国人」と括られる「日系人」でしかない。

アキラ君は日本語ができるのにもかかわらず、「日本人らしくない」と言われることにより、〈普通の日本人〉と異なったものであることを何となくわかっていくことになったと言えよう。それにより、次第に〈普通の日本人〉が使っている日本語ではない日本語として「自分の日本語」を異なるものであると理解していくしかない。そして「日本人らしい日本語」を「敬語」や「漢字」、「日本人らしい発音」であると捉え、それができない自分は、アメリカナイズされた日本人であるため、「日本人らしくない」とさらに考えていくことになるのであろう。その実体のない「日本人らしさ」が本質化していることを問題にしたい。

5. 過去 - 現在 - 未来をつなぐことばの意味とアイデンティティ

鈴木アキラ君は、アメリカで日系人として生きてきた。しかし、自ら日系人であることを意識したことはあまりなかった。彼は、自分のルーツを探求することを望み、一年という期間だが日本にやってきた。日本に帰国したわけではないが、「帰国子女」や「帰国生」、「アメリカナイズされた日本人」として見られた。さまざまなカテゴリーがアキラ君に付与されたのだ。だがアキラ君はそのようなカテゴリーを乗り越え、ありたい自分像を描いていくことになる。そこでは過去 - 現在 - 未来をつなぐことばの意味を見出し、そのことばで生きながら自分のアイデンティティを形成している姿が確認できた。

「移動」とは、過去 - 現在 - 未来という時間と空間の意味が織りなされている。人々のアイデンティティもまた過去 - 現在 - 未来を生きる自分が探求と探索の中で形成していくのである。従って、ことばの教育は過去 - 現在 - 未来をつなぐ教育でなければならず、アイデンティティ形成とつながるものでなければならない。本章では、過去 - 現在 - 未来をつなぐことばの意味を見出すことの意味、そして自分のことばの教育とアイデンティティのあり方の重要性を述べることにしたい。

5. 1. 「日本人であるわたし」から「日系人としてのわたし」

アキラ君は、とりわけ〈普通の日本人〉を目指してきたわけではなく、これからもない。なぜなら、それは永遠にできないからだ。その意味はこの日本という「地」で生まれ、日本的な「考え」や「文化」に生きる人が〈普通の日本人〉であるとされるからだ。母親を〈普通の日本人ではない〉と話したのは、そのような意味である。母親が日本で使われる俗語を

分からないはずであり、この「地」で通用される言葉は理解できないと予測しているのも〈普通の日本人〉ではないからである。それゆえアキラ君は〈普通の日本人〉である自分、「日本人らしい日本語」を目指していない。ただ、日系人として生きる自分は、父の会社を継ぎ、きちんとした生活を送り、日本語もそのために必要であると捉えている。日系人である自分がしていかなければならないこと、アキラ君は「日本人らしくない日本語」を話す自分にはそれが必要であると考えた。それは「日本人だからこうあるべきだ」ということを指しているわけではない。しかし、アキラ君は日本で生まれた〈普通の日本人〉に「日本人らしくない」と言われるたびに、そのルーツを探ることの意味を見失いそうである。日系人の歴史が語るのは、アメリカで生きる〈日本人〉としての自負でもある。日系人の歴史を知ることによってそうあらねばならない自分像が生まれた。それはアキラ君にとって、「日系アメリカ人」として生きてきた、愛する家族のためでもあり、アメリカに生きる日系人としての義務のようなことであろう。このような意識の中でアキラ君は、自ら日本の留学に臨んだが、この留学の経験により、日系人としての自分をさらに強く考えるようになる。「日本人らしくない日本語」を話すアキラ君だが、今では両親に、特に母親に感謝している。家庭では日本語、学校では英語という二言語の使用は、日本語と英語が混ざるなど少々混乱した部分もあるが、それでも家族と日系人の歴史をつなぐ日本語であるからだ。

日本人らしくない日本語でも、まあ、気にしません。普通の日本人が使わなくてもよいと思った日本語があります。その時の日本語って違うし、日本人のものじゃなくてもいいかなーって思って。

現在は、日本語の読み書きはかなり努力している。インターネットの新聞の記事を読み、声を出して読みあげることを行っている。日本語の先生がそのような指導をしているのは、日本語は声を出して読むことが重要であるからだと理解したからだ。確かに、補習校でもそのような授業があり、母親には言えなかったがアキラ君はそれが好きではなかった。今は、好きではないことをあえてしてみることにしたという。日本語は街のいたるところに溢れている。聞くことや話すことには問題がないが、それだけでなく敬語の勉強を含め、書くことと読むこともできる「日系アメリカ人」になりたいと考えている。アメリカで父親が経営している飲食店でアルバイトをしていたとき、注文も英語で受けるため問題はないが、たまに日本人が来るときもあった。そのときに備える為日本で滞在している間、カフェやレストランでアルバイトをしてみたいと考えているが、まだ実現していない。現在は、知り合いからの紹介でファッションモデルのアルバイトを引き受けた。色々な職場で使う日本語を自分のものにしていきたいと考えているからであろうか。アキラ君は、数か月ほど残っている日本の生活を充実させたいと明るく語る。また、日本での生活も、アメリカで送っていた「二言語世界」のように日本語と英語が半分ずつの「二言語生活」である。寮での生活はさまざま

まな国から来た人たちがいて主に英語で話すことが多いが、以前より日本語を習いたくないと反抗することはしない。さらに、アキラ君の「日本語人生」において、日系人の歴史の意味を探することは大切な課題であり、アキラ君の日本語は、日系人の歴史をつなぐものであると強く思ったのである。祖母から母親へ、母親からアキラ君へ、そしてアキラ君の子どもたちへ、日本語と、そしてその子守唄は日系人の歴史とともに家族の絆をつないでくれる。

他の日系人より珍しいほどかなりできるというアキラ君の評価からも推察できるが、アキラ君の母親自身も日本語の勉強を誰よりも頑張ってきたのであろう。そして自分の子どもたちにも日本語を厳しく勉強させてきた。しかしそれは、〈普通の日本人〉としてのアイデンティティのためではない。日系人として生きる中で、見えない「差別」や「人権」があることを考えてほしかったからであると私はインタビューを通じてそう感じた。それを乗り越えるのは、互いが語ることばを持つことによって可能になるからだ。互いが語ることばを持つ意味とは何か、それは互いを理解し合うことである。私はそう理解している。日本ではそのような日系人の暮らしを知らない。ただ、言い方や歩き方、食べ方で「アメリカナイズされた」、「日本的ではない」、「日本人らしくない」という、ある偏見で語っているのである。アキラ君はきっと自ら下した「自分らしさ」を通し、そのような偏見を乗り越え、「差別」や「人権」を語り、そしてそれを社会につなげていくと私はアキラ君の「日本語人生」からそう考えている。そして願っているのだ。

アキラ君は自身の「日本語人生」の中で母親について語ったが、母親を「意味のある他者」であるとしていることがわかる。日系人であるアキラ君の家族にとって、日本語の子守唄は家族の絆と日系人の歴史をつなぐものであった。幼かったときのアキラ君にとって日本語は、日本人であるために学ぶ「言語」でしかなかった。しかし、その「日本語」が自分の誕生から今を支えてくれて、自分の家族をつなげてくれて、これからもその日本語を通じて日系人は生き生きとアメリカで暮らしていくのだという意味を知り、日本語に対する思いが変わってきた。自分と家族において「意味のあることば」であると感じたとき、その日本語はアキラ君にとって、「日本人らしい日本語」でなくてもいいと思われたのだ。それを繋ぐのはことばであり、そのことばで生きながら自分らしさ、自分のアイデンティティを形成しているのである。

5. 2. 自分のことばの教育とアイデンティティの重要性

アキラ君の物語では、「こうである」と規定することがいかに簡単であるかが語られ、彼のアイデンティティを限定させ、固定化させることの問題が指摘された。固定化してしまうまなざしの中で、否が応でも〈帰国子女〉は本質化していくのである。例えば、「帰国子女」と呼ばれる〈変ジャパ〉がいる。彼/彼女らは社会、文化的特性であるぞんざい体と丁寧体、敬語の習得が遅れていて（伊藤，1977）、日常生活語には問題がないが漢字や読解が不得意であり（吉田，1983）、感性が鈍いようで作文を書く時にも論理的な説明ができない

(佐藤, 1981) とされ, それが「問題」であるとまとめられる。そして日本語教育の中で「帰国子女の問題」は際立っていく。それによって新たな「言説」が作り出される。日本の文化に合わない行動をする彼/彼女らは「アメリカナイズ」されていると考えられ, 授業のマナーがよくないこともそうであるからだ, と語られていき, それが「帰国子女」を特徴づけることになるのである。つまり, 「帰国子女」や〈変ジャパ〉になるしかない。また, さらなる問題は「外国人として」, 「マイノリティとして」, 「帰国子女として」というアイデンティティが強調されると, 「日本人」とそうではない人たちという境界が強化され, その中で一人ひとりの関係性ではなく, 限定的で固定的な関係性が確認でき, 目の前にいる他者を常に「〇〇人」と見なしてしまうことになるのではないか。だが, それらを乗り越えられることがことばによって可能であることも確認できた。自分にとって日本語の意味を見出したアキラ君のアイデンティティは, 固定された確固たるものではなく, 自分らしさとは何かを探求・探索しながら, アイデンティティが形成されていくことにつながった。そのときの日本語はアキラ君を支え, 生き方を見つけられるものであったのだ。

固定的な「自己」を越えて, 世界につながることは「自分のことば」を持って可能になるのではないか。そのためにも「自分のことば」が必要であると考え。「ことば」とは, 「わたし」と「他者」との関係を結ぶためのものでなければならない。「人間関係」を生きる「ことば」でなければならない。「わたし」を語りながらアイデンティティを営む「ことば」でなければならない。その「ことば」とは「自分の日本語」, つまり「自分のことば」であった。自分のことばの力は, ことばを通じて自分が変化の主体であることを確かめられる力になり, 現実を構築し, 未来をつなげる力になることであり, それが日本語教育において必要なことばの教育であろう。私は, 日本語教育においてそのことばを育むことが必要であると考えるとともに, 自分のことばの可能性を日本語教育にいかにつなげるかを今後の課題として考えていきたい。

文献

- 池田摩耶子 (1977). 日系人『日本語再発見 (新版)』 (pp. 196-201) 三省堂.
- 伊藤克敏 (1977). 母国語を忘れることの心理構造 (日本語ができない日本人 (特集)). 『言語生活』 308, 18-33.
- 稲垣滋子 (1990). 帰国生と日本語教育コースデザインを考える『異文化間教育』 4, 69-85.
- 江淵一公 (2002). 『バイカルチュラリズムの研究—異文化適応の比較民族誌』九州大学出版会.
- 岡秀樹 (2003). バイリンガリズムの基本概念. JACET バイリンガリズム研究会 (編)『日本のバイリンガル教育—学校の事例から学ぶ』 (pp. 23-40) 三修社.
- 小野博 (1994). 『バイリンガルの科学—どうすればなれるのか?』講談社ブルーバックス.
- 川上郁雄 (2007). 「移動する子どもたち」と言語教育—ことば, 文化, 社会を視野に.

- 佐々木倫子, 砂川裕一, 門倉正美, 細川英雄, 川上郁雄, 牲川波都季 (編) 『変貌する言語教育—多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』 (pp. 85-106) くろしお出版.
- 川上郁雄 (2009). 「移動する子ども」とともに生きるとは. 川上郁雄, 池上摩希子, 齋藤ひろみ, 石井恵理子, 野山広 (編) 『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL 教育と JSL 教育の共振』 (pp. iii-vii) ココ出版.
- 川上郁雄 (2010a). 「移動する子どもたち」のことばの教育学とは何か『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』 1, 1-21.
- 川上郁雄 (編) (2010b). 『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』 くろしお出版.
- 川上郁雄 (2011). 『「移動する子ども」のことばの教育学』 くろしお出版.
- キタガワダイスケ (北川台輔) (1986). 伊達安子 (訳) 『一世と二世』 聖公会出版.
- 北村崇郎 (1992). 『一世としてアメリカに生きて』 草思社.
- 窪田守弘 (1989). 帰国生徒の言語感覚『異文化間教育』 3, 68-80.
- 桜井厚, 小林多寿子 (2005). 『ライフストーリーインタビュー質的研究入門』 せりか書房.
- 佐藤あや子 (1981). 帰国子女に対する作文指導 (表現の指導—書くことを主として〈特集〉) 『日本語教育』 43, 61-73.
- ザトラウスキー, P. (1993). 『日本語談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版.
- 角有紀子, 芹沢ちよ乃, 中西良子, 坪井厚子 (1988). 帰国子女と日本語教育『日本語教育』 66, 110-119.
- 竹沢泰子 (1994). 『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷』 東京大学出版.
- 田村秀一 (1984). 『檻の中の「日米戦争」—日系人強制収容所体験記』 航空新聞社.
- 鄭京姫 (2006). 『学習者の語る日本語人生から「正しい日本語観」を問う』 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文 (未公刊).
- 鄭京姫 (2011a). 言語の境界を生きる—「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識から『リテラシー』 9, 31-40. <http://literacies.9640.jp/vol09.html>
- 鄭京姫 (2011b). 自分らしさを規定するもの—〈わたし〉を語るひとりの日本語学習者のライフヒストリーから. 細川英雄 (編) 『言語教育とアイデンティティ』 (pp. 159-178) 春風社.
- 唐須教光 (2002). 『なぜ子どもに英語なのか—バイリンガルのすすめ』 NHK ブックス 956.
- 中島和子 (1988). 日系子女の日本語教育『日本語教育』 66, 137-150.
- 中島和子 (1998). 『バイリンガル教育の方法』 アルク.
- 中野卓, 桜井厚 (編) (1995). 『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂.

- 新村出 (編) (1998). 『広辞苑 第5版』 岩波書店.
- フリック, U. (2002). 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 (訳) 『質的研究入門—
〈人間の科学〉のための方法論』 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*.
Reinbek-bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag.)
- 文化審議会国語分科会 (2007). 『敬語の指針』 文化庁.
- 巖波ナオミ (1987). 「海外成長日本人」の適応における内部葛藤—ライフ・ヒストリーに
よる研究から『異文化間教育』1, 67-80.
- 本田千恵 (1991). 日系アメリカ人の適応に関する一考察—「成功物語」再考『慶應義塾大
学大学院社会学研究科紀要』31, 9-19.
- 南保輔 (2000). 『海外帰国子女のアイデンティティ—生活経験と通文化的人間形成』 東信
堂.
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (n.d.1). 『海外子女教育の概要』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/001.htm (2011年8月17日閲
覧)
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (n.d.2). 『在外教育施設の概要』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/002.htm (2011年8月17日閲
覧).
- やまだようこ (2007). ナラティブ研究. やまだようこ (編) 『質的心理学の方法—語りをも
きく』 (pp. 54-71) 新曜社.
- 吉田孝 (1983). 現代分析と将来への展望—高校における帰国子女の日本語教育『日本語教
育』50, 79-83.
- Cummins, J. (2000). *Language, power and pedagogy: Bilingual children caught in the
crossfire*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Hoffman, C. (1985). Language acquisition in two trilingual children. *Journal of Multi-
lingual and Multicultural Development*, 6, 479-495.
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not: The education of minorities*. Clevedon:
Multilingual Matters.

ジャーナル「移動する子どもたち」—— ことばの教育を創発する

第3号 2012年5月発行

発 行 者 「移動する子どもたち」研究会

代表 川上郁雄

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

早稲田大学日本語教育研究センター気付

電話：(03) 5346-1893 Eメール：kodomoni-hogo@list.waseda.jp

©「移動する子どもたち」研究会 2012.